

第一六回村研大会の印象から

酒井惠真

今年の村研大会は、富士山を見上げる河口湖町で開かれたが、いつものことながら、開催地関係会員や事務局の方々の御努力もあって盛会裡に終了できたことを一会员として関係各位に感謝したい。

来年は北海道で大会が開かれることがあって、今年の裏方をつとめられた方々に開催地心得をうけたまわるつもりが、はからずも、大会印象記を書かざるをえなくなってしまった。報告者の方々には大変失礼ながら、帰礼の都合で、討議の途中で退席してしまい、討論のまとめをみとどけないので印象記であることをおゆるし願いたい。

さて本年度の共通課題である「農村自治」がとり上げられた経過は「研究通信」に詳しいが、私にとっては若干の失望感をもつていた問題であり、今回の大会にはそれなりの期待があった。というのは、この課題は、前回の課題からの展開ということの意味のみならず、すでに第一二回大会での共通課題「日本資本主義と家」の討議がなされている時から、主体形成や自治の問題が取り上げられてきたからである。その時以来、いささか意識的にこれがいつ、いかなる展開を経て取り上げられ、どういう討議になるかと見守って来たこともあって、昨年の討議も含めて大いに勉強

させていたくつもりでいた。

二三回大会への論点を「研究通信」九六号に高山会員が報告しているが、それには大会前の研究会での報告が共通して追求した「何故、現在「家」を問題として取りあげるのか」の問題の底流には「現段階における農民層分解の性格をとらえ、新しい農業の主体の形成の条件を探つて日本農業の展望を模索しながらも切り開いていかなければならない」とする問題意識があつたと述べられている。同号には島崎会員の「新たに『農村自治体論』を」と題する投稿がのせられており、この段階ですでに主体形成論、自治論への方向づけがみられる。島崎会員はこの投稿の中で農村社会研究の現状を「共同体論以降、農村社会の研究としては何かひとつ焦点のきまらない頼りなさがあった」とい、「分解に・むり、の解体の方向を突き放したように結論づける」論や、「再編を観念的に申しわけのようにいい添える」論がある一方では「理論展望をもたないままの農業見直し論や、村は生きている論」があるなど、村落―農村研究に混迷と停滞がみられると指摘していた。そして、現状分析における「農村社会把握の新しい発想を要請するものとしての「農村自治体論」を提起していた。そのことは同時に「共同体としての村落」研究から「自治体としての農村」研究への転換を意味するものであり、「農村研究の理論課題の構成をかえる」問題であるともいっていた。これは島崎会員の「方法としての地域」(『現代日本の都市と農村』)論ともかかわって注目したい点である。

しかし、その後の共通課題はいきなり自治論に進まず「村落生活の変化と現状」のもとで「農民にとっての生活破壊とは何か」である。それは一見現段階では前提とされている「むらの解体」「農業危機」の現実態的把握を「家」レベルにまでおりて農民生活の現状からとりおさえようとするものであつたし、又個別農家の努力を越えた集団的組織的対応のあり方を問いつつ、主体的再編成の展望をさぐろうとするものであった。この課題の討議の中でもしばしば農村自治は問題とされていた。例えば、東北の研究会で、細谷会員は従来の農業の共同組織、生活の共同にかわる新しい農民の共同性のあり方を考えていく時、行政の問題にぶつかるをえないということを述べ、自治論の提起を重視していた(『研究通信』一〇〇号)。とくに二五回大会の諸報告はこの問題と連結するものといえよう。

このように今回の共通課題は、ここ数年来の課題を貫いて懸案とされて来たもので、いわば、それらの討議の帰結を示すものであると思いながら大会に参加していた。

さて大会での報告は自由報告三本を含めて九本と盛りだくさんであった。共通課題の前半は、明治後半期から始まった町村是調査運動(佐々木報告)、地方改良運動(高木報告)、農民運動(岩本報告)などの展開の中で農民がいかなる形態で「自治」を追求して来たか、あるいはしようとしていたかが事例に即し報告され

佐々木報告では、従来研究史上「官製的農村自治振興策」として批判的・否定的にしかとり上げられていない「町村是調査運動」の本来的意図は「農業改良を促進し、行政村の自治運営をすすめる策如何」とするものであつて、いわば「町村是調査運動—農事改良運動」であるという視点から、この運動のもつ、本来の意図と論理を明らかにしていた。

次の高木報告も、これ又「地方改良運動」がもっぱら内務官僚主導の節約、徵税を柱とする教化活動であるとする従来のとらえ方に對し、農村の側では、税の徵収という國家要請をうけとめるにしても、農民の生活水準の向上や生産力増強という経済発展を集團目標にすえたものとならなくては運動は進まない点に注目すべきであるといふ。そして国家と農村との両者の間にあってその運動を担わねばならぬ町村行政担当者は、その矛盾する要請をどのように調整しながらそれを「むらづくり」として推進していくたかについての事例が紹介されていた。両報告とも、運動のとらえ方を官製的教化の側面のみならず、生産力増強—農事改良の側面と相即的に出されている点で共通していたが、私には、むしろ後者に力点をおいて「農村自治」への視点を導き出そうとしているようにみえた。これに対して報告者の一人である不破会員から疑問が出されていたが、討論は平行線のままであった。

三番目の岩本報告は、山形の農民運動の事例から「農民運動の形成基盤はどうつくられたか」の視点から、生産力担当層→農村自治の担い手の問題にせまろうとしていた。そして農民運動の担

い手としての小作農のあり方を通して、中農的經營層に着目していいたようである。これに関連しては関連の研究会で報告があつた森武磨氏の「農村更生運動と村落」（研究通信一一号）においても中農層の動向に注目しているのとあわせて興味深く聞いた。

これらの歴史分析の立場からの報告はいずれも門外漢の私にとって勉強の対象のなものでもないが、三者とも、戦前の日本の農村に自治はあつたか、なかつたか、をめぐっての見解を報告の中から抽出してもらえた私のようなものにも理解が深まったようと思える。それと戦前の場合、特に「共同体」（その解体過程も含めて）と「自治」の関係をどういう関連でとらえたらしいのかも、御教示いただけたらと思つた。

さて後半は、農業・農村が危機的状況にある現段階での「自治」が三つの事例で報告された。

まず、白樺報告は農民の生産—生活過程の変化を基軸として再編成される村落での諸関係、諸組織との機能の変化をおい、新しく形成されつつある共同性をさぐり出し、今日の「農村自治」のあり方を模索するものであった。事例としては諸負耕作で有名な安城市高棚町がとり上げられていた。事例では自治機能が部落組織—協議会を中心とした生活共同性と農協を軸とした社会的協業、協働形態の二つの側面にあるとしているが、兼業化、「混住化」が急激に進んでいた中での農村地域諸階層と「自治」のかかわりの点で興味深かつたが、この二側面の地域における組織機能上の関連がどうなっているか、協議会と自治体との関連など、「自

治」を担う組織体の位置がよくわからなかつたのと、司会も指摘していたが、「所有と生産の分離」の進行の中で自治の担い手に変化がみられるとして、それを「市民的自治」の担い手層の形成と表現していたが、それはいかなる内容と性格をもつたものといえるのかあきらかではなく、疑問のままになつてゐた。

次の不破、新妻報告は、「自治」の主体の側面から「自治」を考えようとするもので、しかも住民の自治能力の形成過程に注目するものであった。そして「住民自治」実現の場を地方自治体において、その政治的構造の変化へ革新町政への転換へを担つた労働、農民の運動の動向を追いつゝ住民意志の実現の過程を明らかにしようとした。報告事例は岩手県の山林地主が政治的経済的支配力を持つ山村、岩泉町である。労働運動が企業内、職場内闘争から抜け出て、地域問題を自らの課題として掲げ、それが地域住民の要求掘起しをすすめ、革新町政を実現させていった。しかし、組織労働者の先進的活動に対しても、タイトルにある農民の側の運動や対応についてはあまりふれられていないのは何故か聞きたかった。それと、革新一期目という町政が「住民自治」をどれだけ実現したか、「住民自治」に値する客観的保証がどれだけ実現しうるのかという点についても深めてほしかつた。

これらの報告に対する討論については、後半退席したことでもあって多くはふれられない。しかし、生活破壊、などの時とは異り比較的研究会などで問題点が集約していくにもかかわらず、具体的な報告の中から論点が出されて深められていく契機を見つけられないままに討論が盛上らなかつたのは残念という他ない。課題設定の一年目があるので自由に問題を取りあげながら問題をしほしていくことになるのかもしれないが、司会者の発言もあつたように「歴史と現状の接合的把握はきわめて困難である」というのは私にとっても切実な実感といえる。史的分析と現状分析の二つ

整備をも取組む。そして國やその他の行政に依存することなく、自己の問題処理を可能にするための団体として機能しているといふ。これは前二者と異り自治体を越えていける点では「自治」の範域は越えるが、その主体が農業、農民を中心とするという点で限界がある。報告にはしかった点を一つあげると、地方自治体との関係、農協などの他の経済団体、部落組織との関係などのこの区域内の内部構造ともいうべき仕組みがあきらかにしてほしかつた。

三つの報告を聞いて、それぞれの報告は、それぞれ異ったレベルでの「自治」の範域がとり上げられていたが、それらの各レベル相互の関連構造がかなならずしも浮び上つてこない感じがした。「自治」の範域のちがいは「自治」の内容を異にするものであり、又担い手のちがいをも内包していると思われる。それらの累積された構造がどういうものかが農民、住民の側からとらえられることが必要ではないか。

の分野を同時に討議の対象に据えられたのが討論の焦点を絞りにくくしてはいなかつたか。「変化と現状」と「史的展開と現状」との間の差は意外に大きいのではないかというのが実感である。次回を期待したい。

自由報告にふれられなかつたが、若手の会員が今日の農業・農村問題における主要課題に取り組んでいる意欲をかいたい。もう少し質疑の時間があれば報告者にとって有意義だつたかもしけない。

印象記を依頼されながら、多忙を理由にすつかり期日がすぎて書いたために生々しい大会の雰囲気を伝えるものとならなかつた。事務局の方に御迷惑をおかけしたことも含めて内心忸怩たるものがある。来年度の大会の開催地会員の一人として快適な大会ができるよう努めることでおゆるしいいただきたい。へ多数の会員の参加を期待して。＼